

発刊の辞

一九七〇年四月二七日「日本福音主義神学会」が設立されたことは、全能の神の不思議な導きによるところである。わたしたちは、「わたしたちが求め、また思うところの一切を、はるかに越えてかなえて下さることが出来る方に」、栄光と讃美と感謝を捧げる。

また、神学会の設立以来、思いに過ぐる祝福を受けて、名誉会員、正会員、準会員を合せて一四一名の会員を与えられ、今また、本学会の会誌「福音主義神学」の創刊号を送り出すことになった。

本誌は今後、毎年一回あて刊行される予定であるが、次の三つの根本的確信に立っている。

一、聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教は、真理である。

二、福音主義キリスト教は、厳密な学問的解明と弁証を要求し、またそれが可能である。

三、健全な教会の形成と強力な福音宣教のため、福音主義キリスト教神学は、必須である。

わたしたちは、聖書の十全靈感を信ずる信仰の立場が、神学を拒否するのではなく、かえって、旺盛で活潑な神学活動をうながし、また真に根元的な、真に全体的な神学的拠点を与え、信仰と学問の根本的一致と相互必要性を真の意味で保証するものであることを確信する。また、本学会は、実用主義的な意

味で、すべての学問的成果が、直ちに教会形成と宣教に結びつくとは考えないが、しかし、徹底的に聖書的、厳密に学問的な福音主義神学が、真の意味で教会と宣教に奉仕する神学であることを確信するものである。

本誌が、祖国における神学と教会と宣教のため豊かに用いられ、神の栄光を顕すにいたるよう祈る。

一九七〇年九月二三日

日本福音主義神学会

理事長 矢 内 昭 二

The Old Testament, An Introduction, Harper & Row, New York, 1965.

R. K. Harrison:
INTRODUCTION
TO THE OLD TESTAMENT

Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1970. 1325 pp. \$ 12.50

鍋谷 堯 爾

ハリソンの「旧約緒論」を手にする時、自由主義神学者は知識を強調し、保守主義神学者は信仰を強調するというような区分は通用しないことが判る。本年一月発行の本書は、本文一七二ページ、索引四〇ページの大著であるが、一四章にわたって最近までの旧約学の成果と傾向、そのための資料が、健全な神学的判断と聖書信仰の上に立つて提示せられている。脚註にあげられている参考図書は一九六五年までのものであるが、とくに、フォン・ラートの「旧約神学」、アイスフェルトの紹介は興味深い。

註 フォン・ラート、アイスフェルトのものは、英文で読むことができる。

Von Rad, *Old Testament Theology*, Harper & Row, New York, (Vol. I, 1962; Vol. II, 1965); *Old Testament*,

R. K. Harrisonは、カナダ、トロントのウィクリフ大学の旧約学教授である。ロンドン大学より神学士、神学修士、哲学博士、名誉神学博士の学位を受けているだけに、イギリスの神学的気風を受けついでいると言えよう。H・H・ローリーに強く影響されていることは次のことばで知ることができる、「ローリーは、戦後イギリスにおける最高の旧約学者である。彼は神学と調和の人であり、旧約学の領域だけでなく、学問一般の面から言っても十分に尊敬されうる正確且つ詳細な学術的伝統を確立した。S・H・フックと並んで、ローリーは、時代のもっとも独創的な思想家であり、イギリスにおいて聖書の統一性が以前より強調されるようになったのは、彼に負う所が多い」(六九ページ)。

彼は、一九四七—四九年、イングランド、プリストルのクリフトン神学大学のチャプレン、一九四九—五二年、西オントリオ大学の新約学と聖書ギリシャ語教授、その後、旧約学の教授に転向、一九六〇年より現職についている。著書には、「ヘブル語独習」「旧約時代の歴史」「旧約考古学学習」「新約考古学学習」「今日の詩篇」「死海写本」などがある。又、ウェストミンスター神学校の世界的旧約学の権威であったヤング博士の死に伴い、ニュー・インターナショナル・コメンタリーの編集

責任を負うことになった。

註 ヤング博士のニュー・インターナショナル・コメンタリーのイザヤ書は、昨年第二巻が出版され、第三巻の出版が待たれている。博士は、奇しくも第三巻四〇—六六章完結の一週間後、すなわち、一九六八年二月一日に急逝された。又、大阪神学院教授服部嘉明博士は六年有半にわたってヤング博士の指導を受けられたのであるが、博士論文「エゼキエル書における残れる者の思想」の最終口頭試問を受けられた数日後に同じ経験をされたのである。E. J. Young, *The Book of Isaiah*, Eerdmans (Vol. I, 1965; Vol. II, 1969).

本書の内容は、一四部のうち、はじめの七部が概論に、あと七部が各論に分けられている。後半では、旧約各書巻に関する資料、緒論的問題が紹介せられている、たとえばイザヤ書であると、第一〇部第二章に三六ページが割かれており、統一性、著者性の問題に関する批評の歴史が紹介され、それに対する評価が下されている。その中で、クロス預言に関する著者の立場を見ると、クロス預言の可能性をそのまま受け入れたヤングの立場と違って、著者は統一性を支持しつつも、四四章二八と四五章一の「クロス」名称を後期の挿入と見る(これは立場は違っても、ユニオンのスマートと同じ立場である)。

註 James D. Smart, *History and Theology in Second*

Isaiah, Westminster Press, p. 121

本書の前半は、つぎのとおりである。

- 第一部 旧約研究の発展
- 第二部 考古学の歴史的展望
- 第三部 古代中近東世界の年代学
- 第四部 旧約本文と正典
- 第五部 旧約歴史
- 第六部 旧約宗教
- 第七部 旧約神学

この中に含まれた内容については、すでにほん訳で多くの良書が紹介せられているが、本書のよさは、それが適当な長さで、読み易くまとめられている点である。

註 第一部については、ヤング「旧約緒論」聖書図書刊行会一三—四三ページ、第二、五、六部は、ブライト「イスラエル史」上、下、聖文舎、第三部、フイネガン「聖書年代学」岩波書店、第四部、グルトワイン「旧約本文」聖文舎、拙訳近刊などが適当と思われる。

第七部旧約神学は、第一章、旧約神学の歴史、第二章、聖書解釈、第三章、聖書の権威に分かれているが、その二、三カ所を紹介しよう。

「一九二六年、オットー・アイスフェルトは、イスラエル宗

教の歴史的研究を旧約信仰が本質的に啓示の問題であるという見解と混同する弁証神学者たちの試みに内在する危険性に対して警告した。……

不幸なことに、アイスフェルトの重要な貢献は、啓示が、その活動の所与の場としての歴史的過程とこみいった結びつき方をしているという事実を見逃したことである。それゆえ旧約のハイルスゲシヒテと全く無縁なやり方で内在的歴史状況から信仰をとってしまおうとする理由でないかぎり、歴史的研究と神学的解釈を無理に二分することは誤りである」(四二八—九ページ)。

「アルトとノートの全般的研究法に基いた旧約神学の包括的研究は、一九五七年に、フォン・ラートにより達成された。本書における旧約神学諸問題に対するフォーム・クリティシズムのぼう大な適用は、その基本的態度が、神の偉大な行為に対するアンフィクチオニーの所産である、古イスラエルの証言としてのヘブル人信仰の歴史的特徴を繰返すことであるという仮定に基いてなされている。そうすることによって、フォン・ラートは、歴史的型式によって旧約のハイルスゲシヒテを繰返しながら、アイヒロートによつてもくろまれたイスラエルの『信仰の世界』と縁を切ったのである。……

フォン・ラートの著書は、顕著な権威者風の文体であり、判断が恣意的となり、旧約神学の他の見解に非寛容になつていく。フォン・ラートによれば、彼のやり方以外は、非歴史的に

なるという印象を受ける。それは、静的な歴史像しか描くことができず、歴史の出会いの流れの中に進行する啓示の概念を呈示しないからであると主張する」(四三二—七ページ)。

第七部は、福音主義神学会の事業として、ぜひ、ほん訳していただきたいと願っている。

(神戸ルーテル神学校教授)

Leon Morris:

STUDIES IN THE FOURTH GOSPEL

Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans, 1969. 368 pp. \$8.95

伊藤 顕 栄

「私はあらゆる種類の意見を持つ人々の本を読むが、根本的に意見を異にする人々からも少なからず益を受けるのである。そこで私は本書において、この罪を繰り返し、様々の学者たちのあらゆる種類の意見を引用した。」(9ページ)

「むしろ保守的福音主義者として私は読者に、私はこの書物の中において提起されている大きな問題を取り扱う真剣な努力をしてきたことを確言したく思う。私はいかなる既成の立場や、ある一派の主義主張を弁護しようとはしなかった。できる

限り私は、事実をしてその行きつく所に私を連れて行かせた。

……少なくともこれは、証拠を基盤として問題を捕えようとするまじめな努力であることを確言したいと私は思うのである。」(11ページ)

序言にある右のような言葉でもわかるように、リオン・モリスは本書において純粋な学究的態度をもって、あらゆる種類の資料を用いながら、第四福音書の持つ問題点を取り扱っている。

著者リオン・モリスは既に多くの人が承知していると思うが、ケンブリッジでPhDを得、現在メルボルンのリドリー・カレッジの学長をしている人で、既に二十冊に及ぶ書物を世に送り出している新約の大家である。ティンデル・コメンタリにおいても幾つかの書物の注解をしているが、最近はニュー・インターナショナル・コメンタリのヨハネによる福音書の注解に取り組んできていたようである。この間に発表した論文や講義が集録されている本書は、やがて出版される注解書の緒論の役目を果たしていると思われる。

本書は六つの大きな問題を内容としているが、目次は次のようになっている。

- 一、第四福音書の共観福音書との関係
- 二、第四福音書における歴史と神学
- 三、第四福音書の著者は目撃者だったか
- 四、第四福音書の著者

付録ノートA 使徒ヨハネは早く殉教したとの伝説
付録ノートB 第四福音書の年代
五、変化——ヨハネの文体の特徴
六、死海書巻と聖ヨハネの福音書

次にこれらの内容を簡単に紹介してみよう。

一、共観福音書との関係についてモリスは、C・K・バレット等の意見に対して、ヨハネの独立性を主張している。彼は両者間の類似性を全く無視するのではないが、むしろ両者間の相違点に注意すべきことを指摘している。

大きな相違としては、共観福音書がイエスのガリラヤにおける働きを記しているのに対し、ヨハネのはエルサレムにおけるものであることが指摘されている。続いて両者間の相違点を一章から順に具体的に挙げて、相違の理由を別の伝説によるからだというC・H・ドッドの説に見いだしている。しかしこの伝説は共観福音書の伝説とは互いに結びつくものだとし、それらが共通の人物に関する描写を相互補助的に形成している例証を詳しく示している。

二、歴史と神学の部分において、モリスは第四福音書の著者が神学者であることに同意するが、同福音書が単なる神学的文書であるとするボルンカムやケーゼマン等、最近のドイツ神学の傾向に反対している。そしてこの福音書はある一つの物語を伝えているのであり、実際に起こったことと、説教と、著者自身の意見を記しているものであるという。

「歴史的事件は歴史家が創造しない限り存在しない……」(70ページ)「解釈と無関係な『事実』は存在しない」(71ページ)という歴史観から、モリスは福音書記者たちは皆、もともとと神学者なのであるという。だから福音書は、実際に起こったことと、それらが起こった方法とに関心をもちたこれらの著者によって、それぞれの解釈を経て記されたものであると表明する。

これに対して歴史的イエスをわれわれは知り得ないという考えは、仮定の上に立つ様式史的研究に依存することによるものだと、これを手痛く攻撃している。

「神学的伝説と同じく、イエスの言葉と行為の歴史的伝説は、このように事実根ざしている。」(86、87ページ)「様式史的研究は新約のこの面を全く見逃がしている。しかしそれはそこにあるのだ。福音書の中には重要な神学的要点と思われるものに、ただ単に、それが起こった故に挿入されているものが多いがある。」「……の中にはクリュグマと関係のない、イエスの生涯についての多量の情報がある。同じことが福音書についても真理である。」(87ページ)「福音書記者たちが歴史的イエスに強い関心を持っていたことと、それが彼らの書物の支配的要素であったことを明白にしておくことは重要なことである」(89ページ)と彼の論は進んでいく。

四つの福音書の相違点は、実は福音書の調和を示すものであることを論じた後、モリスは、ヨハネ福音書の基盤は結局、著

者ではなく、イエスの思想と教えにあるのだとしている。三、この歴史性の問題は、著者が目撃者であるかという部分において更に展開されている。第四福音書を各章ごとに順を追って、証人性の証拠となる点をていねいに指摘しながら、モリスは、小説作家が創造するには困難であるが、目撃者には必然的に焼き付いている、大して重要でない、細かな描写が数え切れないほどあると教えてくれる。そして著者が目撃者であるということが最も可能な説明であると慎重に結論づけている。

四、著者問題についてモリスは、ウェストコットの強力な保守的見解に対して、近年の学究は何も付け足すことができないのではないかとしている。そして彼のぼう大な内証、外証を丹念に取り上げた後、モリスは、R・V・G・タスカーのように「この福音書はヨハネによって確証された(権威づけられた)」が、ヨハネによって書かれたものでない(264ページ)という結論が出て当然である。しかし、ウェストコットの立場がとられるべきではないか。なぜなら彼のぼう大な議論は決定的に論駁されていないからであるとする。そして結論として、「より簡単な解決法を受け入れることがより良いことと思われる。それは即ち、この福音書の責任をとるのはヨハネである」(280ページ)という。言葉は少し不明確であるが欄外註を見ると、使徒ヨハネの著作性以外考えられないということがわかる。

第四福音書の著作の年代は、常に福音書中最後のものであり、恐らく第一世紀の終わり、九〇—一〇〇年頃とされてきた

が(近年、二世紀説が打ち出されている)、付録ノートBでは、これを検討し、正確な年代決定は困難であり、求むべきでないが、AD七〇年以後だと要求するものは何もないように見えると言っていることに注意したい。

五、最初の共観福音書との関係とも関連しているが、第五章のヨハネの文体の項には、特に興味をそられるのを覚える。それは同じことを繰り返して言う場合、ヨハネは意味は同じでも必ず違った表現を使っているという事実である。それを二重の変化、三重の変化、引用文との変化等と分類して細かにリストアップしている。この部分は特に、三章、二十一章等の文体上の問題の解明に貢献すると思われる。

六、最後にモリスは、クムラン文書との比較をし、両者間には間接的な接触——パプテスマのヨハネと思われる——があったのではないかと想定している。またこの福音書がヘレニスティックではなく、むしろユダヤ的であり、パレスチナ的であることを示している。

要約すれば、本書はヨハネの福音書をあらゆる角度から学問的に、最新の情報資料を充分に用い、本文のち密な分析作業を経ながら、福音的、伝統的見解を再確認する方向づけをした貴重な書物だと言えるだろう。その意味において、福音主義に立つと否に関わらず、全ての人に一読を勧めたいと思う。

アードマン社のもの以外に、英国バタノスター・プレスからも出ているが、この方が値段が安い。英語は実に読みやすく、

頭だけでなく、心に迫ってくるものさえ感じる。惜しむらくは第八章の姦淫の女の記事の問題が取り扱われていないことと、巻末にビブリオグラフィが欠けていることである。
(アッセンブリー中央聖書学院教授、アッセンブリー篠原教会牧師)

A・リチャードソン著

『科学の時代の中の聖書』

新教出版社 二六八頁 四二〇円

斉藤孝志

本書を始めて手にしたときには、表題から判断して、科学と信仰について論じている書であろうときめこんで、買ってはみたもののしばらく机の上でほこりをかぶっていた。ある先生が本書を読んで「最近読んだ書の中では最良の書である」とおっしゃるので、改めて本書を見直し、読んでみたが、確かにいいせんできる良書であることを知った。

著者アラン・リチャードソンは『新約聖書神学概論』などで、日本でもよく知られた英国教会の神学者である。非常に幅の広い学者で、新約、旧約、教義学の多方面において著作をしている。

本書は著者が、バーミンガム大学において行なったカドベリ講演をまとめたものである。科学の時代と言われる現代において、ややもすると聖書が何か時代遅れの書のように扱われがちであるが、現代においても聖書の真理は、神の言葉として有効であることを弁証している。著者は、このような意図を持って、過去三百年の科学と歴史の世界における驚くべき変革の中にあつて、聖書の解釈の仕方がいかに変遷してきたかを歴史的に述べ、最後に著者の聖書解釈の立場を明らかにし、聖書は歴史的事実に基づいた救済史であることを主張している。バルトとブルトマンを批判しながら、両者の長所を認めていることは印象的であつた。

著者は、本書において、科学的革命、歴史思考における変革、神学思想における変革、シュライエルマツハーよりバルトまで、実存主義神学、「救済史」神学、形象の神学、聖書の成就の八項目について論じている。

著者は十七世紀を科学的革命の世紀とし、十九世紀は歴史思考における変革の世紀とみていることは興味深い。新しい科学者たちは聖書の真理に抵抗したのではなく、中世の神学思想を支配したアリストテレスの権威に対して抵抗したのであり、科学文明の発達は、キリスト教が人類に与えた遺産であると著者は考える。真に革命的なのは、自然全体が、演繹的方法によつてではなく、観察と実験による帰納的方法によつて研究され始めたことである。そのために、真理と認められうる真理は、た

だ経験科学の方法によつて立証できるものであるという考えが広くゆきわたつていく(31頁)。方法論の変化によつて、自然科学は、哲学から解放されて、今や独立した経験的学問としての生得権を獲得した。十九世紀にいたり、この科学的方法是、人間の歴史にまで適用され、ここに革命の第二段階を迎える。

ダーウインの進化論、ヘーゲルの弁証法的歴史観の影響のもとに、歴史的批評的聖書研究が急速に発達する。その意味において、歴史観の変革は、科学の変革よりも、神学思想に重大な影響を与えることとなる。この時期に英国の神学界ではウェストコット、ライトフット、ホート、サンデーなど自由主義的正統主義の立場の聖書学者たちが、新しい批評的歴史的な研究法を聖書解釈に適用して、それがキリスト教信仰をいささかも損うものでないことを立証した。しかし古代アレクサンドリア学派や近代ロマン主義の形における非聖書の靈感の範疇は、科学の時代において、聖書の権威についての真理を再述するために十分な基礎を提供しえないことが明らかとなった(86頁)。次に著者は大陸の神学に目を転じ、シュライエルマツハーからバルトまでの神学史の素描を試み、歴史的研究法がいかに大きな影響を神学の歴史に与えたかを述べている。シュライエルマツハー、リッツェル、ハルナックと続いた極めて楽観的な自由主義神学は、一九一九年に発行されたバルトのロマ書によつてまづこうから反対され、シュライエルマツハーの時代は終り、バルトの時代が始まった。バルトによつて再びキリスト教は啓示宗教

としての本質を回復した。彼は聖書をキリスト教神学における権威の正しい位置に回復し、一方、それと同時に、十九世紀の偉大な科学的遺産である歴史の批評的研究方法を放棄しなかった(111頁)として、著者はバルトの貢献を高く評価している。バルトの人間論に関しては、あまりに極端に悲観的であり、非聖書的であると論じている。

歴史的聖書研究が、聖書の外面的なものの研究であるのに対して、実存主義神学は、聖書の内面的なものの研究である。しかもブルトマンの実存主義神学は、ハイデッガーの実存主義哲学に基づくものであり、聖書を実存主義哲学によつて解釈するものである。しかし著者は、「実存主義哲学の範疇は、聖書における神の言葉の意味を明らかにし、伝達しようとする企てによつて非常に有用であるといえよう」(119頁)と言つて、実存主義哲学の長所を指摘している。この点に関しては、著者の評価は甘すぎるように思う。聖書の実存と哲学的実存の区別をしながら、哲学的実存を媒介として、聖書の実存を評価しているなら話は別だが、ブルトマンのように哲学的実存をもつて聖書の実存を骨抜きにしてしまうような聖書解釈は、危険というべきであらう。聖書を歴史的にのみならず、実存的に解釈すべきであることを志向したブルトマンの意図は高く評価しつつも、方法が哲学的である限り、それは中世紀への逆向であるように思う。ブルトマンは歴史的聖書研究の面においても結局は、歴史批評学派や、宗教史学派の伝統から抜けきれなかった(123

頁)。ブルトマンの「非神話化」の問題についても、著者は、聖書は神話ではなく、歴史的事実に基づいた救済史であり、形象であるとして、ブルトマンの神話説を一蹴している。しかし著者は「ブルトマンの人間学はバルトのものよりも適切であり、聖書的である」(135頁)として、ブルトマンの人間観を高く評価している。

聖書を外面的のみならず、内面的に解釈すべきであるとしたブルトマンの意図は正しい。又聖書のメッセージを現代の言葉に置き代えて、現代人に理解される言葉で伝えるべきであるとしたブルトマンの意図も正しい。しかしそのために用いた彼の「方法」は誤つていと言わざるをえない。そこで著者は、最後に自分の神学的立場を六、七、八章において述べる。ドッド、クルマン、ライトの救済史神学者の神学を紹介し、ブルトマンの神話論を徹底的に否定し、聖書の啓示は、神話的表現をもつて表現されているのではなく、その啓示は、歴史的啓示であり、救済史の形で表現されていると主張している(156頁)。救済史学派の中心的主張は、聖書が証言している出来事における神のみわざの事実性であると述べて、著者の立場を明白にしている(164頁)。

形象の神学の部では、「神と歴史における神のみわざとは、象徴的言語によつてしか語られえない。神話と象徴とを明瞭に区別することは非常に重要である。なぜなら聖書は神話的物語ではなく、象徴的言語を扱っているからである」(177頁)とし

て、歴史に啓示された神のみわざを神話としてではなく、形象として解釈すべきであるという著者の主張をうかがうことができる。最後の章において、著者はキリストについての使徒的証言は、神が歴史のなかにおいてその民を扱いたもう型に伴う成就を宣言しているがゆえに、真理であることが保証されると論じている。

本書は、聖書神学の立場より、科学と宗教の問題を明快に論じた良書である。科学の時代と言われ、科学的聖書研究が依然として盛んな現代において、本書は、私たちに多くの示唆を与える書である。ただ物足りなく感じるのは、聖書の外面的研究として、批評的歴史的研究法を高く評価しながら、聖書の内面的研究法としては実存的な聖書解釈法以外に明確な解釈法を提示していないことである。又著者は、歴史的 (Profangeschichte or Historie) と救済史 (Heilsgeschichte) の区別と、その両者の正しい位置づけに関しては、充分な説明がされていないことである。せっかく科学と宗教の問題を方法論的に解明してきたのだから、この問題についてもと言及し、掘り下げて欲しかった。

(東京聖書学院教授 ホーリネス府中教会牧師)

岡田 稔著

『改革派教理学教本』

新教出版社 五一六頁 一八〇〇円

泉田 昭

神学の本は一ページ読めば眠くなり、二ページも読むと頭痛がするので、岡田先生の「改革派教理学教本」もしばらくツンドクをきめこんでおいた。しかし、しばしの暇ができたので、本棚からとりだして読みはじめた。読みだすと面白くて、一気に読了した。組織神学や教理学の本をこんなに楽しく読むことができたのは生れてはじめての経験で、私の脳組織に突然変異が生じたのではないかと疑った。しかしよく考えてゆくうちに、楽しく読めた理由は、私の脳組織の突然変異ではなく、岡田先生の「改革派教理学教本」にあることに気づいた。

これまで読んできた神学関係の本の多くは生硬な翻訳か晦渋な用語の羅列であったが、岡田先生の「改革派教理学教本」は先生の長い牧会と神学教師の生活の中において育かれたものであり、身についている。おそらく教会や教室で繰返し語られてきたものであり、先生に親しく接してきた者たちは、この本を読むと、先生特有の語り口をなつかしく思い起すことである

う。問題意識によってではなく現実の信仰と生活の中において生みだされたところに、本書の健全さを読んで楽しくなる理由があるようだ。しかし、反面、現代における問題意識をかかえて読む者には、懐したくなる教理学教本でもある。しかし、著者が次の世代に求めておられることは、性急な否定や破壊ではなく克服と前進であろう。謙虚に次のように述べておられる。

「改革派教理は一つの固定した概念とか体系というようなものではない。しかし聖書では神の啓示が形式的に定着しているのに対して、この啓示の持つ意味内容は、伝統的教理として既に世々の教会の中に一つの精神的遺産となって存在している。どんな上手な教理学者でもそれを十全には述べていない。どこかに手抜きか手落ちがある。いわば一長一短をまぬがれない。だから教理学者の手並はこの場合極めて二次的な問題である。その点芸術作品とは違うのである。たとえば説教は下手でも聖書的であれば福音は伝えられるように、教理学は不出来でも改革派教理は読者に伝わるのである。だからまだ日本人の手で書かれた改革派教理が一つも出版されていない現状では、わたしの下手な教科書の役目もわたしの独りよがりではないかも知れぬ。中には先輩の書き落とした落穂拾いという案外の奉仕もできるかも知れないのである」

落穂拾いではない、豊かな収穫であり、改革派教理の集大成となっている。

さて、この教本は次のような構造となっており、L・ベルコフの「組織神学」によく似ている。第一篇神学序説および神についての教理、第二篇神学的人間論、第三篇神保者の教理、第四篇キリストの事業論、第五篇救拯における聖霊の事業、第六篇教会と恩恵の手段の教理、第七篇終末論。この構造を一見して感ずることは、やはり教理学的であって、キリスト論と救拯論の比重が大きいことである。

第一篇では、第二章「教理学と聖書」を興味深く読んだ。著者の基本的姿勢は、次のことばに要約されているようだ。「人間の考えは常に目分量であり感に頼るもので正確とは言えぬ。ことに人間の目にはいらぬ世界こそ教理学の対象となっている事実であり、真理である。アウグスティヌスの言うように可視物のうち世界は最巨大物であり、不可見物のうちで神こそ最大のものである。もちろんこの場合の巨大性ということは、量的な大きさではなく、主権性の偉大さの意味であろう。神の目で見、神の心で量られる時、単なる類似の多少ではなく真偽の区別が問題となる。だから信条への忠誠は必ずしも教理学の良否判定の規準とはならぬ。信条は第二義的規準であって、根本的には聖書のみが唯一絶対の規準である。教理学は信条にもとづきつつ、信条をより聖書的に完成へ導く役目を持つ。しかし聖書を修正するということはキリスト教にとって致命的な破壊工作となるから絶対的に拒否されねばならない」。

最近の聖書学や出版ジャーナリズムの一般的傾向は、「聖書

は文字通り神の言葉であるというドグマは破壊されたが、そこに再発見されてきたイスラエル民族の歴史には現代の人間にも重大な意味を持つ^⑨」ものがあるという考え方であり、そのような考え方からするならば著者の聖書観は古いと言われるかも知れぬ。しかし、私たちはここにこそ著者のすぐれた聖書信仰にもとづく神のリアリティに対する深い自覚があることを知るのである。

第二篇は神学的人間論である。この篇では、(一)人間の創造と摂理 (二)墮罪の事情と原因 (三)罪の本質とその種類 (四)原罪論と改革派教理の伝統に従って手堅く論を進め、(五)人間論における不盲点では、靈魂の起源、業の契約の教理の意義、アダムは救われたるか、と言った興味深い問題に論及しておられる。その他(六)この世における人間、について語っておられるが、「新しいヒューマニズム」や「世俗化時代における人間論」と言った科学的・倫理的に極めて今日的な問題については全く触れておられぬ。人間理解が神学の方角を決定する重大な基点であることを思うとき、本書の伝統的安定感とともに時代的限界を淋しく感ぜざるを得ない。

第三篇は仲保者の教理である。当然のことながら恵みの契約がまず基本的なこととして論及され、その契約における仲保者キリストの位置が強調されている。キリストの完全人性論の中で、次のように論及されていることは最近のイエス論、ロゴス論の論議とあわせ考えると興味深い。「そこで当然、個人であれ

ば人格も含まれていることになる。個的人格のない個人はいないからマリヤがロゴスが受けた人性は一人の人間イエスではなかったのかという反論ができるわけである。しかしロゴスがマリヤと関係する前に、マリヤの胎内に既にイエスという一人人が存在したかのように考えて行くことは、結局は人間イエスがロゴスを受けたとか、ロゴスがイエスに乗り込んだと見る方向しか発展されぬ。ロゴスがマリヤから人性をとった時マリヤは一人人であって、そこにはマリヤと人格的に区別されたイエスなる胎児はまだ存在してはいなかった。受肉と処女降誕とはかくのごとく終始一つの出来事としてしか考えられない^⑩。現代の異端に対する鋭い警告のことばとなっており、穏当な神学の威力をまざまざと見せつけられるようなことばである。

紙数の関係で第六篇の「教会と恩恵の手段の教理」に移ってゆきたい。第一章は教会の本質であり、第二章は教会と神の国である。共に教理史的視点に立ちつつ、簡潔に纏めあげられている。しかし積義的成果と現実の教会論の視点を加えて論及されたならば、教科書以上のものとなって牧会的にも有益な書となったのではないかと惜しまれる。それは第三章の教会と国家の問題においても同様であり、ダブナーの国家論をもとにして簡潔に纏めあげられるのも結構であるが、現在の日本において激しく論じられているこの問題に鋭く神学的メスを振ってもらいたかった。そこに現代の教会における神学の重大な役割があり、神学者の存在意義があると信じるからである。

戸村政博篇

『靖国闘争』

新教出版社、四七〇頁、八五〇円

泥谷逸郎

著者はこれまでの神学については実によく理解し消化しており、それらを堅実な改革派信仰に立ちつつ円熟した手腕をもって立派に纏めあげておられる。それは容易に見えて難事業であり、岡田先生であつてはじめて可能となったことである。このような本を手にすることができたことは、ただ改革派の者たちだけではなく、私たちにも喜ばしいことである。しかしこれで満足することなく、これを超えたものを生み出す努力も必要である。特に激しい現代神学の流れの中にあつて、それらと対決しつつ神学的営みをするによって、さらにすぐれたものを生み出すことができるであらう。そこに福音主義神学会の課題と責任もあると信じる。しかし、そのために、本書はすべての人に読まれ、真面目に取組んでゆかなければならない書である。

注

- ① 「改革派教理学教本」 三六ページ
 - ② 同 二七ページ
 - ③ 講談社「聖書の世界」I 四ページ
 - ④ 「改革派教理学教本」 二〇七ページ
 - ⑤ 同 四一一―四四六ページ
- (練馬バプテスト教会牧師、聖契神学校講師)

靖国神社法案に対する戦いは、本書の副題が示すとおり、終りなき自由への戦いである。今後、この戦いは日本キリスト教界をあげてなされる、長い長い闘争となっていくであらう。われわれは法案賛成者の救いを願うものであるが、この悪法との闘争は手をゆるめるわけにいかないのである。

第一部は「靖国神社法案とその周辺」と題して、法案の経過と問題点の指摘と靖国神社問題の周辺について、熱情をもって戦いをリードしてこられた戸村政博氏が執筆しておられる。内容は戦いにじかにたずさわってこられた著者の鋭い問題点の浮きぼりと法案が最終的にまとまる経過が手にとるように明確に述べられている。

第二部は「福音と世界」の中ですでに発表された宮田光雄氏の「信教の自由の現代的意義」、森平太氏の「戦争責任としての神社問題」、寺田利氏の「神社と宗教と政治」が転載されており、他に藤谷俊雄氏の「国家神道の本質」が文化評論から、

相沢久氏の「靖国神社国家管理の問題」が彼の「現代国家における宗教と政治」(増補版、勁草書房、一九六九年)から転載されている。さらに新宗連で熱心に靖国法案に反対運動を指導しておられる縄田早苗氏の「靖国神社法案の源流」が発表されている。こうして、六つの論文から第二部の神社・宗教・政治が成り立っている。いずれもすぐれた論文であり、示唆に富んだ内容である。これらの論文を読んで感ぜられることは、靖国神社法案に対する戦いは単なる信教の自由とか憲法上の戦いとどまらず、結局のところ神社神道との戦いであるということである。われわれは戦いの連帯性を広める意味では、他の反対派と協調できる線として憲法を建て前としなければならない。しかし、キリスト者はそこでとどまることはできない。結局は、先程もいったように神社神道との戦いにまで意識を深めていかなければならないのである。この第二部を読むとき、以上のような感想は、クリスチャンであれば誰でもいだくにちがない。

第三部は二百五十ページ以上をさいて靖国問題に関する資料をのせている。まず、靖国神社法案関係の重要な資料があまるところなく掲載されている。続いて関係法規の抜粋がのせられている。第三に靖国神社をめぐる国会議事録抜粋、第四に靖国神社国家護持に対するいろいろの見解、第五にマスコミ関係の投書、発表することをさしとめられた論文やラジオ放送原文が収録されている。第六に、「靖国」賛成・反対派のリーフレッ

トから、第七に靖国を国家護持することに反対する声明・決議文の重立ったものがのせられている。この資料集は非常にすぐれたものであり、このように綿密な資料集は他にも例がないと思われるほどにすぐれたものである。

最後に、神社問題年表(一八六八—一九七〇)が収録されている。これによって日本における神社問題が一目瞭然に理解できる。

この一書を読み終るとき、靖国神社法案のもつ問題の広さ深さを徹底的に知らされる。そして、これは何とかしなければならぬという思いを強く持たせる内容である。

将来は日本教会史の一つの重要な資料となる書物であると思う。ぜひとも読者は購読されるようにおすすめしたい。

われわれ福音主義者の立ち場から不満を述べるとするならば、一つとしてわれわれの具体的な運動とか声明文が掲載されていないことである。決してのせるに値しないものではなく、確かに値するものがあつたにもかかわらず取り上げられていないのは残念至極である。このような総括はできるだけ広く、ほとんどの反対派を満足させる努力が少なくとも運動を統一し、また拡大するのに必要不可欠と思う。

後藤 光三著

『説教』

聖書図書刊行会、四八六ページ、一三〇〇円

尾山 令仁

実践神学の分野において、日本人の手になる本格的労作は、今までほとんど見当たらない現状である。そうした中で、これだけ大部のものを一書にまとめたこの本は、福音主義の立場に立った著者によって書かれたものとして、きわめて意義のある著作である。専門書でありながら、一九六〇年以來、三刷をかさねてきていることは、その内容の充実性が高く買われていることにあると思われる。実践神学の分野の著作は、とかく理論か実践かの一方に偏りがちであるのに対して、この本は、伝統的な説教の立場を、よくふまえながら、しかも幅広く、パランスのとれた叙述につとめている。

まず「説教の歴史」を述べたのち、「説教と聖書解釈」「説教と説教者」「説教の原理」「説教の工夫」「説教の配列」「説教の組立」「説教の演述」と、全部で八章に分けて論述しているが、説教の実際を述べる前に理論を述べていることは、福音主義の立場に立った説教の理論的裏付けとしてまことに有効であ

る。とかく聖書に関するお話に終わるか、もしくは聖書のみことばについての感話か、あかしか、さもなければ、聖句の綴り合わせですませてしまいがちの福音主義陣営の説教に対して、「説教と聖書解釈」「説教の原理」がはつきりと述べられていることは、この本の意義を、さらに深いものとしている。

著者は、「説教の特色」という項目のところで、「説教の主体は、どこまでも神にある。神が説教者において語りたもうのである。すなわち講演のように神について語るのではなく、神の言を語るのである。……したがって説教は、すべて聖書の説教でなければならないということである」(一七四ページ)と述べたのち、「説教が神の言の宣言であれば、当然、説教は断定的でなければならない」(一七六ページ)と言い、また「しかし神の言を、そのまま綴り合わせて語ることがけつして説教にはならない。説教とは、そんなまやかしいものではない。……説教には、御言の解釈と適用が必要であるが、それとともに、説教者の信仰、人格、生活が含まなければならない」(一七九、一八〇ページ)という。さらに「説教の中心的課題」という項目においても、「説教においてわれらは、あらゆる問題を取り扱う。この時代の多くの問題にわたって論じることとも可能である。しかし説教は、新聞の社説でもなければ、雑誌の論文でもない。これは、あくまでも福音でなくてはならない。説教には常に、神の語りかけなる強いメッセージ、十字架の救いが明白に説かれるものでなくてはならない。……説教は

この時代のうちにおいて語られるものであるが、時代をこえて、常に救いの福音を語るものでなくてはならない(一九〇ページ)と述べている。また「説教史より見た説教の本義」においては、「説教の本義はつねにイエス・キリストとその福音の証言でなくてはならない」(八〇ページ)とも述べている。ここに著者の「説教の本質論」が述べられているように思う。

この『説教』には「説教への演述」というきわめて親切な実際の問題についての解説が付されている。これもまた著者の長年の経験が生んだものであると思う。この点は、必ずしも牧師の説教に資するばかりでなく、広く教会学校教師をはじめ、人の前で何かを話す人の場合の参考にならうと思う。

以上述べたように、この本は、説教の理論と實際を述べたきわめて有益な書物である。しかしながら、同じ福音主義の立場に立つ一後輩の徒として、みことばの奉仕のために、しつて要望を述べることが許されるならば、次の二、三点について付言しておこうと思う。これはあくまでも福音主義陣営における教会の建徳のため、神の栄光のためであることを、おことわりしておく。

この本は、福音主義の立場に立つて書かれている。そのため「説教と聖書解釈」および「説教の原理」という二章が、きわめて重要な意味をもっている。ところで、福音主義の立場に立つ者として、聖書講義と説教との相違について、もう少し突っこんで明らかにしてほしかったと思う。説教と講演との違いに

ついてはよく述べられている(一七三—一七五ページ)。しかし説教と聖書講義との違いについての説明は見当らない。無教会主義の「聖書集会」は、毎日曜日に、聖書講義を行なっている。それと説教とは同じものなのか、それとも違うのかという点である。その点がはっきりしてくると、説教とは何かという本質的な問題が、もう一段の深みにまで突っこまれるのではない。またこの本では「説教の原理」という章の下に、「礼拝と説教」という項目が設けられていて、礼拝の中心が説教であることを明らかにしている。それだけに、聖書講義と説教の相違点について述べることは重要であろうと思う。ローマ・カトリック教会との対比における説明は、きわめて十分になされているのに、この点が見当らないのは、惜しいことだと思う。

また「説教の分類」という項の下に教理的、道徳的、歴史的、経験的、場合的の五つに分類しておられるが、どうしてこのような分類を、今も踏襲しなければならないのかという理由が、十分でないように思われる。何かを分類する場合、いかなるものを尺度として分類するかということが重要なことであり、しかもそうした尺度を採用しなければならない理由が述べられなければならないはずだ。そうでなければ、講解説教、主題説教などの分類が取り上げられなかった理由が明確でないと思う。しかしこの書で「講解説教」についてほとんど触れられていないのは、福音主義の立場に立つ場合、気になることではないだろうか。というのは、著者も「説教は、聖書から出て、あ

くまでも聖書に忠実であることが大切である」(七九ページ)と述べておられるからである。

また礼拝において占める説教の位置をその中心に置いていることは正しいと思うが、そのために、伝道集会などにおける説教についての配慮が必ずしも十分でないように思われる。説教を、その対象が信者向け、未信者向けと分けることは、必ずしも本質的なことではないと思うが、実際に説教をする場合、何を指すべきか、そのあたりの問題が必ずしも明瞭ではないように思われる。説教とは、「生活指導の面」(一八四ページ)にも触れる以上、信者の霊的成長をも目指すものであるはずであり、と同時に、「常に救いの福音を語るもの」(一九〇ページ)であるとすれば、もう一步進んで、説教とは、単なる聖書解釈ではないはずであり、そこには、説教におけるエトスの問題が語られなければならないのではないか。

わたしたち福音主義の立場に立つ説教者が、ほんとうに知りたいことは、説教のために、聖書のテキストを読み、その釈義をし、それをまとめてノートに書いてみても、いざ説教をする時になると、そのみことばに説教者が捕えられ、みことばを十分に消化しきれていないことではないかと思う。説教者自身、説教者の重い任務について知っており、神からの召命も受けており、説教者としての正しい主にある信仰生活も送っているのに(一一八—一五四ページ)、説教に力が欠けているというのを感じることがしばしばある。どこに問題があるというの

か。説教者自身がととのえられていれば、力強い説教ができるとか、説教の組立てがちゃんと出来ていれば、それができるはずだ、などとも言われる。しかしわたしはそうしたことが出来ていても、それだけでは十分でなく、もっとほかに問題があるのだと思っている。それが説教の問題なのでありこれが解決されないかぎり、力強い説教をすることはできないと思う。説教者がどんなに正しい信仰生活と、説教のための準備をしても、それだけで、力強い説教ができるとは思わないのである。自分が語ることにしているの信仰がなければならぬはずだ。そのことについては、この本においても当然のこととして語られているわけだが、実は、その点にこそ、多くの説教者はつまづいているように思われる。だから、この点についても、取り上げてほしかった。わたしは、これをエトスの問題だと考えている。真理の説得性に対する信頼であり、神のことばへの信仰である。

ともあれ、これだけの大部のものを、日本のキリスト教会のために一書にまとめられた労には、心からの感謝と敬意を払わなければならないと思う。今後、この本を土台として、日本のキリスト教会の説教がさらに充実し、教会が祝され、教会を通して神の栄光があらわされるようにと願ってやまない。

(単立高田馬場教会牧師)

宗教哲学

書評と学界ニュース

ドワイウェールのキリスト教哲学

ハーヴィー・スミット

最近、『西洋思想のたそがれ』が出版されて、ついに一般日本人も法理念の哲学の創立者の著作を読めるようになった。カルヴァンやA・カイパーの伝統に従うこの独特なキリスト教哲学は、オランダに始まり、南アフリカ、イギリス、カナダ、アメリカに波及して、大勢の追隨者を得た。

法理念の哲学の創立者は、アムステルダム自由大学の二人の教授である。ヘルマン・ドワイウェール博士は、一九二六年以来、法学を教えていたが、ヨーロッパの学者らしく、その部門だけに限定されることなく法学の哲学的基礎をも研究し、法学と他の学問の関係の問題をも徹底的に調べた。一般の哲学を勉強する外に、特に新カント派哲学を充分研究した。その後、義理の兄弟フォレンホーフエンと共に、このキリスト教哲学を造り上げたのである。

D・H・フォレンホーフエン博士も、一九二六年以来、哲学教授であり、彼も二つの部門、神学と哲学とに精通し、引退時

には自由大学哲学部長であった。

このキリスト教哲学を宣伝するため、二人は「カルヴァン主義哲学協会」を創立し、雑誌『改革派哲学』を出版し、オランダの諸大学に特別講座を創設し、カナダにある「キリスト教的学問の発展のための協会」にも根拠を与えた。また、キリスト教哲学自身を発達させる目標にもとづき、これにもとづく諸科学の独特の諸側面や様態を研究する学科を学部内に設けた。

この二人の教授の著作では、重複した部分もあるが、フォレンホーフエン教授のおもな著作は、倫理学や哲学の部門であって、ことにソクラテス前のギリシア哲学を徹底的に研究した。ドワイウェール教授のおもな仕事は、キリスト教哲学の組織的な研究や、哲学史の大体の輪廓の研究であった。彼らのオランダ語著作の主要なものは次のとおりである——

D.H. Vollenhoven: "Logos en Ratio," kok, Kampen, 1926

"Het Calvinisme en de Reformatie van de Wijsbegeerte,"

H.J. Paris, Amsterdam, 1933

"Geschiedenis der Wijsbegeerte," Vol. 1. Wever, Franeker, 1950

H. Dooyeweerd: "De Crisis in de Humanistische Staatsleer in her licht einer Calvinistische Kosmologie en Kennistheorie," Ten Have, Amsterdam, 1931

"De Wijsbegeerte der Wetsidee," Vol. 1, 2, 3. H. J. Paris, Amsterdam, 1935

"Reformatie en Scholastiek in de Wijsbegeerte," Vol. 1. Wever, Franeker, 1949

ドワイウェールは、これ以前に書いた本のおもな概念や学説を、アメリカやカナダでの一連の講演でくり返して、一九六〇年に出版した。それが今年訳出された『西洋思想のたそがれ』で、ドワイウェールの考えかたの良い概論である。訳者(春名純人氏)のすぐれた後書きが加えられたので、原著よりもすぐれた物になったであろう。わずかな外国語の誤植を除けば、この訳書の印刷は美しく、翻訳も、評者にわかる限りで、正確かつ明せきである。

次に、ドワイウェール哲学について、説明や論評を加えたいと思う。哲学の専門家の場合には不必要であろうが、専門外の学者、とくに二〇世紀初頭のドイツ哲学や新カント派哲学をよく知らぬ読者には、役に立つものと思う。

カルヴァンとカイパーの作品を熟知する者には、ドワイウェールがその伝統に従いその思想を展開したのだと主張しても、それが直線的な展開でないことは明らかである。彼の用語や区別も違っており、基礎や目標は同じでも提出する問いや問題は異なっている。その差はどこから由来したかといえは、ドワイウェールが現代の人であり、若かりし頃、カントの伝統、特に新カント学派に深く感化されたからである。これは批判として述べているのでなく、彼の哲学のある特色を理解する

ためには認めなければならないことだと、私は思う。

ドワイウェールの出発点は、キリスト教だけではなくて哲学についてのもその独特な概念であり、哲学の機能、性質、役割りについての特色ある考えである。それによれば、哲学は現実や自我の全的意味にむかう理論的思惟である、と定義される。これは一般的に認められた概念ではないが、ドワイウェールの、思惟の理論的態度に対する超越論的批判と深い関係をもっている。実に、その批判の可能性を与える概念である。

第一に、哲学は知恵ではなく科学とみなされる。理論的思惟の範囲内にとどまって、他の科学の基本的態度を共有している。このような哲学についての概念は、ドイツ的伝統にふさわしく、イギリスやアメリカの見かたとは異なっている。『法理念の哲学』で、ドワイウェールは、哲学が生きる術であるという概念を明確に拒んで、それは宗教からの世界観・人生観と哲学の理論的研究とを混同する間違であると主張した。だから、哲学について限られた概念をもっており、理論的態度に支配される科学と考えている。

思惟の理論的態度の特長は、対立の関係である。その対立関係は、主体客体関係と違って、複雑な具体的な物を対象にせず、現実の物から一つの側面だけを抽出して研究する。たとえば、素朴経験の客体として、人は鉛筆を買ったり、鉛筆で手紙を書いたりするだろうが、理論的思惟の対立としては、その鉛筆自身を考えないで一本の鉛筆であること、その物質的形状、

経済的な面すなわちその値段などを考える。そのように、一つの側面だけを抽出して対立として調べる。すべての科学は、対立関係だけをもっている。

ところが哲学は、一つの側面だけに限られないで、全的意味すなわち全部の側面と相互関係や自我との関係をも研究する。それをして、ドイウエルトによれば、哲学は素朴経験の客体を研究しているのではなくて、理論的思惟の中で批判しているのだ。だから、哲学は、超越的批判をせず（それをすれば科学の範囲から離れる）、超越論的批判だけをする。キリスト教そのものは超越的批判をするだろうが、キリスト教哲学はカントの伝統に従い超越論的批判によって自己の科学性を守る。望むところは、一側面を対立としていない哲学の理論的思惟内の働きを、超越論的な問題にすることである。ドイウエルトは、その可能性を前提しているようだ。彼の哲学観は、この可能性を前提しているからである。しかし、この考えそのものも、問題にすべきではないだろうか。

理論的な科学として、哲学は、三つの根本的な超越論的問題を取扱う。どうして理論的な抽象ができるか？ どうして理論的な総合ができるか？ どうして自己批判ができるか？ この三つはすべて、ドイウエルトの哲学概念の系統的原理から意味をみだし、その原理を認めることに基いている。

法理念の哲学の一つの強みは、他の哲学を批判するための良い基本を与えることである。この本に略述し他の本に詳述して

られ、現実の全体にかかわりがないようである。だから、素朴経験の方が大切だと主張はしても、彼の哲学からは反対の印象をうけるだろう。

二、ドイウエルトの、「ドグマや批判に対する見かたは、オランダ改革派の「原理的」な理想にも影響された。これは直接的にアブラハム・カイパーからの考えかたであって、これによると、人は自分の行ないや思想の宗教的な根源を認識すべきであるという。この理想の影響が波及するに従い、オランダの党派さえも宗教的原理にもとづくものとなっている。またその理想に従って、オランダ人は、深い批評をする素質を発達させるに至った。

三、ついに、ドイウエルトの理論的批判は、哲学の昔からの理想を具体化している——無調査の生命はふさわしからず。だから、ドイウエルトは、自分の仮定を調査しようとしている。もちろん、この点でドイウエルトの立場は唯一ではない。R・G・コリングウッドはその著『形而上学』で、哲学の前提の歴史的な性質をも、以前から主張していた。現代の哲学者は、わずかの人を除いて、哲学が超理論的前提をもつことを否定しないだろう。ドイウエルトの独特な寄与は、そのような前提が歴史的に決定されるだけでなく、宗教的にも決定される、という教説である。また、そのような宗教的弁証法に支配されたことと、理論的思惟の自律性のドグマとの関係を明らかにした寄与である。

いるギリシャ哲学、スコラ哲学、実体主義哲学のおおのの宗教弁証法的動因にもとづく批判は、有益である。フオレンホーフェンの歴史的な批判よりも役に立つ、と私は思う。特に、一つの側面を絶対化することによってあらゆるイズムが生ずるという説明は、そうである。ただ、宗教的な弁証法的動因なるものが、そんなに明らかにされておらず、彼の哲学との内面的関連も明示されていない。

もう一つの強みは、ドイウエルト哲学の批判的な性格である。読者も認めると思うが、ドイウエルトの「ドグマ」や「批判」という言葉の使いかたは、普通のと違う。多くの哲学者にとって、「批判」という言葉は聖書批評を思い出させ、キリスト教信仰に有害な批判を連想させる。「ドグマ」という言葉は、教会の決定的な教説を思わせるだろう。しかし、ドイウエルト哲学の用語法では、キリスト教哲学だけが「批判的」であり、非キリスト教的哲学はみな「ドグマチック」である。どうして、そのような意味変化があるかといえば、ドイウエルトの批判概念にはいろいろの根源があるからである。

一、カントによると、批判的思惟が科学的であると、他の考えかたを全部ドグマチックとした。ドイウエルトはその平均をとって、理論的な思惟が完全な現実ではない、と主張している。素朴経験や全体としての客体やキリスト教の生ける信仰は、理論的思惟にまさって、もっと重大な、生命の維持に必要なものだ、と主張する。しかし、彼の哲学は、理論的批判に限

しかし、そのように、他の哲学の歴史的宗教的な前提をよく説明すると共に、キリスト教哲学の前提の宗教的性格を明確に主張してはいるが、この前提の歴史的な性格を弱めているようにみえる。決して、キリスト教の根本動因の歴史性を否定しないだろうけれども、現代のキリスト教哲学の基礎とするために、聖書の根本モチーフを時代に適応変化させる可能性がないのだろうか。フオレンホーフェンによると、すべての哲学は、伝統的な構造の上に、取り扱う問題の根本を与える歴史的背景によって形造られる。しかし、ドイウエルトは、自分の哲学と現代の背景との関係を無視しているようだ。時代の宗教的弁証法から離れてキリスト教哲学は、無歴史的になるのだろうか。フイロンフィア・ペレンニアになるのだろうか。これで時代に連絡ができるであろうか。キリスト教哲学の明らかな性質を主張しても、内蔵している傾向をおのずから暴露するであろう。

結局、ドイウエルトは、独特な哲学についての概念をもっている上に、哲学に唯一の位置を与えている。まことの哲学すなわちキリスト教哲学は、思惟の理論的態度を共有しても普通の科学にまさって、一つの現実の側面に限られない。哲学は、生命の完全な現実と、科学の抽象的な立場との間に立って、また科学と宗教の中心との間に、唯一の通訳者や審判者の役割をもっている。

このような役割りは、別々の科学に、特に神学に認められるか、という問題がある。神学者は普通、哲学が彼らの思惟に根

本や構造を与えるという主張を、不快に思う。バルトは、そのような影響をはっきりと否定した。神学を前提している哲学構造や根本によって、神学を批判することは、神学者にとっては不公平な批判である。ドイウエールの哲学は、この面倒な扱いにくい点を柔らげず、かえって、神学を一つの側面に限って、哲学の優位を主張している。そのためにも、オランダの多くの専門神学者は、この哲学を認めていない。

上述の論評は、ドイウエールト哲学のキリスト教的性格や有用性をおぼつかなくするものではない。確かに、この哲学は、科学の相互関係、宗教的中心との関係を、明確にし説明しており、また、宗教の立場から歴史の哲学をよく批判している。しかし、一つの危険な傾向がある。それは、ドイウエールト自身は避けられたが、彼の弟子たちはどうだろうか。弟子たちは、師の警告を無視して、この教えをキリスト教哲学の一つと見なさずに、一つしかないキリスト教哲学と見なすようだ。そして、超歴史的前提をもっている上に、哲学の構造も超歴史的であると考えて、すべてのキリスト教哲学のための一つしかない真正の根本を与えている、と考えるようだ。けれども、そう考えるなら、この哲学の寄与を誤解し、その影響を制限することになる。すべての信者に利益のある教説になる代りに、一つの哲学々派の教説となるからである。

この注意に心しながら、本書を勉強すれば、カルヴァンやカイパーの伝統に従うキリスト教哲学の有益な概論となり、ま

た、キリスト教の立場から他の哲学や科学の位置を批判しうる方法を明らかに説明している好著である。(文責 神原康夫)
(キリスト改革派日本伝道会宣教師 哲学博士)

△学界ニュース・トピック▽

旧約

鍋谷 堯 爾

モーヴィンケルを

焦点としたノルウェーの旧約学界

一九二二年、モーヴィンケルが、『詩篇研究』を出版、旧約における祭儀と礼拝の意義に新しい光を投じて以来、ウエルハウゼンを頂点とする文献批評学に鉄槌を下し、又、グンケルの類型的、伝承史的研究とも違った祭儀的解釈法を打ちたてて、デスマークのペーデルセン、スウェーデンのエンゲネルらと共に、いわゆる旧約のスカンジナビヤ学派の主流を形成していった。彼の名著「ハン・ソム・コンメ」(来たるべきお方)は、一九五一年に出版され、英語でも出版され、「*He that cometh*」(Sigmund Mowinkel, Abingdon Press, New York, 1956) 現在も欧米旧約学界に大きな話題を投じ、又、日本においても、戦後、旧約神

学とは文献批評しかないと思こんでいた所から、文学類型研究が中沢氏らによって打破された後、祭儀的研究ということが最近よく語られるようになってきている。

ここで、私は、モーヴィンケルの神学的立場を批評するのではなく、モーヴィンケルに対するノルウェー教会の反応、とくに、福音派の反応というものを紹介してみたい。そのためには、まずノルウェーのキリスト教会について知っておかねばならない。ノルウェーは、すでに一世紀にオラフ二世によってキリスト教国化され、一五三六六年にルーテル教会となり、国教として今日に至っている。それゆえ三五〇万の国民のほとんどは、幼児洗礼を受け、形式的にはルーテル教会の会員となっている。教会数は一三〇〇、牧師の数は一〇〇〇である。そして、牧師は、一九世紀まで、ノルウェーでの唯一の総合大学であるオスロ大学神学部卒業者であった。ところが、一八世紀はじめハウグ(一七七一—一八二四)学校の学的レベルを引上げること、説教が信徒伝道者として立ち、敬虔主義、信徒主義、福音主義によるリバイバルを起こし、一方では、ますます形式化、合理化する神学界の傾向の中で、一九〇七年、オスロ大学神学部教授であったオドランドは、独立神学校を樹立、ハレスビー、オラフ・モーなどの協力を得て、オスロ大学神学部に勝る神学校をつくりあげていったのである。モーヴィンケルがオスロ大学講師(一九一七)、助教授(一九二二)、教授(一九四〇)と活躍していったのは、じつに、このような烈しい神学闘争のさ中であつたことをおぼえなければならない。とくに、一九二〇年以後は、自由主義神学か、聖書主義神学かということに、国をあげての戦いがなされたのである。ところが、その時、独立神学校の旧約教授ボルド(Karl Vold)は、神学的に戦うだけの力を持っていないかった。その後、一九四六年よりセイエスター(Ivar P. Seierstad)が立ち、本年引退するまで教授として活躍した。彼

新約

山口 昇

では、牧師の八〇パーセントと、有資格宣教師の全部が独立神学校を卒業することになった。今日、オスロ大学ではカペルド (A.S. Kapelrud) が教授となり、おんけんな立場で、とくに、考古学、一般向旧約紹介で活躍しているが、独立神学校では、セイエスターの後人ソーベス (Magne Soebes) も新進教授として注目せられている。又、モーヴィンケルも今日研究されているが、彼に対する最大の批判は、説教に対する熱情を失わせたということであった。筆者が七年前ノルウェーに行った時も、セイエスターは知っていたても、モーヴィンケルは知らないクリスチャンが多かった。このことは、とくに、小教信徒、多数教団、低レベル福音主義神学を特徴とする日本で神学をめざす若い学究の徒に、「神学と実践」の機微を思いめぐらせる貴重な示唆を与えるものであろう。

(神戸ルーテル神学校教授)

学界ニュースと言っても、当の福音主義神学会は発足して間もないので、本格的な部会活動は始まっておらず、秋の研究発表に期待をしたい。

そこで、今回は最近の「史的イエス」研究の文献を紹介してみたいと思う。

エルンスト・ケーゼマンはポスト・ブルトマンのひとりとして、新しい史的イエスの探求の必要性を提唱したので有名であるが、彼の新約研究の論文が集められて *New Testament Questions of Today* という題で、SCM の *New Testament Library* の中の一冊として出版されている。これには一五の論文が含まれているが、六つが福音書に関するものであり、さらに六つがパウロ書簡に関するものであり、残りの三つが一般的な主題に関するものとされている。その中の *The Jesus of History*

Controversy という論文において、彼はレシヤスの立場は、古いタイプのイエス伝の継続であり、自由主義と敬虔主義を混合したものである、と批判している。またブルトマンに対しても、もし彼の言うように、原始教会が史的イエスに対して興味を持っていなかったなら、だれも福音書を書きはしなかったろう、と批判している。

それから、小冊子ではあるが、*What can we know about Jesus?* St. Andrew Press には Ferdinand Hahn, 'The Quest of the Historical Jesus and the Special Character of the Sources Available to Us' という論文、J. G. Bornkamm, 'The Significance of the Historical Jesus for Faith' という論文が含まれている。前者は史的イエスの発見のために、全ての入手出来る資料を検討して、最後に、復活以後の概念と、当時のユダヤ教の思想を反映する要素を取除くことが必要であり、その時はじめて史的イエスの明確な像を知り得るという。後者は、福音書の資料はイエスの生涯を再建するのに十分ではないが、イエスは確かに、福音書

中に存在するという。そして、史的探求ではなく、信仰が、ナザレのイエスの中にキリストを見出さしめるのであると述べている。

In Search of the Historical Jesus, Scribners は H.K. McArthur の編集したもので、史的イエスの探求に関するシンポジウムである。二十三人の寄稿者によって、論じられているが、ブルトマンをはじめ、T.W. Manson, V. テイラー、ドッド、C.K. バレット、エレミヤス、クルマンなどが含まれている。

(共立女子聖書学院院长)

実践神学

尾山 令仁

実践神学の分野はきわめて広く、ほかの分野にはいろいろなものはみなこの中にはいるような観がなくはない。そのため、総合的な実践神学としての学会は見当らない。近ごろでは、この実践神学という分野が必

ずしも説教、牧会学、伝道学といったものばかりでなく、キリスト教教育学から倫理学、牧会カウンセリングにいたるまで、かなり広がってきている。その中でも、牧会カウンセリングに関する研究が盛んである。これは、牧会学というよりも、むしろ心理学的アプローチをかなりとり入れている。最近とくに教会論に関する論議が盛んになってきているのは、実践神学の分野がかなり重視されてきている証拠ではないかと思う。新教出版社から出されている「現代神学の潮流」4 の C.W. ウィリアムズ著『教会』によく紹介されている。Hans King が一九六七年に出版した *Die Kirche* は、同じ年に、ニューヨークの *Sheed & Ward* より *The Church* として翻訳された。その中で、カトリックの神学者の教会論が、かなりプロテスタントのそれに近いことは、注目を集めている。

全般的に見て、アメリカでは、教会論は、その本質的なものの研究よりは、むしろ機能的な面の研究が盛んである。一九六七年に Ralph G. Turnbull の編集で、

Baker Book House から出版した *Baker's Dictionary of Practical Theology* は、実践神学の全分野にわたるものであるが、本質的なものの追求は、ほとんどなされておらず、むしろ実際的なものの手引きといった観のあることが、なにかものたりなさを感じさせないでもない。この点に関しては、アメリカのフラー神学校にある教会成長研究所 (The Institute of Church Growth at Fuller Theological Seminary) の所長 マックガヴァン (Donald McGavran) による教会成長に関する一連の研究も同様である。ただこの福音主義の立場に立った学者の研究が、はからずも WCC 方面でかなり注目されていることは、付け加えておいていいだろう。

実践神学という学問が、その神学性を十分に追求されぬまま、ただ教会管理の理論として、社会科学の傾向の中に含みこまれていってしまうのではないかと不安は、今後、深刻に取り上げられなければならないことではないかと思う。

最後に、わが国における牧会カウンセリング

(単立高田馬場教会牧師)

J・M・キタガワ編『現代の宗教学』

(堀 一郎監訳、東京大学出版会)

A5 三二六頁 一二〇〇円)

宗 教 学

矢内 昭 二

ングについての関心の高まりを示すものとして、最近、この種の著作が非常に多く、それについて少しく紹介しておこう。W・E・オーツ著『現代牧会論——牧会心理学序説——』(近藤裕訳、ヨルダン社)ヒルトナー著『牧会カウンセリング——キリスト教カウンセリングの原理と実際——』(西垣二一訳、日基教団出版局)ポール・E・ジョンソン著『人間理解への道——リスボンシブ・カウンセリングの実際——』(武田健訳、日本YMCA出版部)近藤裕著『キリスト教カウンセリング入門』(ヨルダン社)バプテスト連盟宣教研究委員会編『宣教とカウンセリング』(ヨルダン社)トウルナイゼン著『牧会学——慰めの対話——』(加藤常昭訳、日基教団出版局)P・オルセン著『牧会相談と精神療法』(赤星進訳、聖文舎)P・オルセン著『病氣と信仰』(山内六郎訳、聖文舎)。ただし福音主義の立場に立つ著作はあまり見当らず、小助川次雄先生が健闘しておられる。(この項の作製については、吉岡繁、小助川次雄の両先生に負うところが多い。)

書評欄で宗教哲学関係のものを取り上げたので、この欄では、宗教学関係のものを二、三紹介する。

M・エリアーデ『聖と俗』

(風間敏夫訳、法政大学出版局、
B6 二五八頁 八五〇円)

著者は、宗教史の事例を引用するに当たって、そのつど文化史的関連を示さなかったから、本書は本来の意味における宗教学の書物ではないが、聖なるものの現象形態と宗教的価値に充ちた世界に住む人間の状況を叙述するから、宗教学の一般入門書として役立つかもしれない、といっている。

『永遠回帰の神話』(堀一郎訳、未来社)と共にエリアーデの思想のすぐれた入門書である。この二著は、ハーパー・トーチブックスに英訳がある。

著者は、宗教史の事例を引用するに当たって、そのつど文化史的関連を示さなかったから、本書は本来の意味における宗教学の書物ではないが、聖なるものの現象形態と宗教的価値に充ちた世界に住む人間の状況を叙述するから、宗教学の一般入門書として役立つかもしれない、といっている。

これは、一九六二年に、M・エリアーデ、J・M・キタガワ共編、岸本英夫監訳で東京大学出版会から刊行された『宗教学入門』の姉妹編として考えていい。共に、ヨアヒム・ワッハ——M・エリアーデと続くシカゴ大学の宗教学科から生れた成果である。一九六五年の秋、宗教現象の解釈学的方法を主題とした宗教学のシンポジウムが同大学で行なわれたが、その時の講演が、本書の主内容である。両書を合せて、シカゴ大学の宗教学だけでなく、アメリカの、更に広く現代の宗教学の世界的動向を知ることが出来、宗教学の方法、課題、現代における宗教学の意義が明瞭に認識せられるであろう。特にキリスト教と関係する論文は、『宗教学と解釈』(キース・W・ボレ)、『神の死とキリスト教の独自性』(アルタイザー)、『組織神学者にとつての宗教学の意義』(ティリッヒ)である。

G・メンシング『宗教学史』

(下宮守之訳 創造社)

B6 一二三頁 三三〇円)

宗教学史あるいは宗教学説史の皆無である時だけに、小著ながら大家の筆になる本書が訳出、出版されたことを喜びたい。本書の特徴をあげると一二〇頁ばかりの小著が、近代宗教学の独立までの、前史に七〇頁も使っていること(前記エリアーデ『聖と俗』にも付録に簡潔な『宗教学の歴史』二〇五—二二二頁があるが、前史に一一頁も使っている)、近代宗教学の叙述のところで『理解の宗教学』(宗教現象学的立場の成立とその内容紹介)に比較的詳しく二四頁も使っていることであろう。エリアーデもメンシングも共に、ルドルフ・オットーの『聖なるもの』(一九一七年)の画期的な意義を強調していることが強く印象に残った。

二 宗教の実証的研究(脇本平也)である。この論文は近代宗教学の成立から、研究の分化と統合という問題をふまえ、宗教学の学問としての独自性を追求しつつ、全体としての宗教現象の構造と機能を説明するところに現代宗教学の課題をみている。エリアーデ、メンシングと共に本論文をぜひ併読されたい。アメリカ宗教学の展望および近況については、『宗教学入門』、『現代の宗教学』中の北川三夫論文を参照されたい。

(改革派東京教会牧師)

この宗教学史との関連でぜひ取り上げておきたいのは、岩波講座 哲学15『宗教と道德』のⅡ現代における宗教理論の展開、

神の摂理のうちに誕生した

日本福音主義神学会

村瀬俊夫

序

日本福音主義神学会が誕生した経過報告をしるすことが私に課せられた責任であるが、少しばかり難感めいたことから書きはじめることにしたい。

日本のキリスト教界において、福音主義的グループは、いかなる存在と役割を担っているか。この問いに答えることは、実は、それほど容易なことではない。なぜなら、福音主義とは何であるか、ということがそれほど明白ではないからである。周知のように、ドイツでは、福音主義教会といえ、カトリック教会に対するプロテスタント教会をさす言葉である。そういうことであるなら、日本のプロテスタント教会は、みな福音主義的グループに含まれることになる。しかし、私たちが「福音主義」というとき、それは明らかにプロテスタント教会の中における一つの立場を指示している。

日本のキリスト教界には、いろいろ変わったグループがある。日本にしかない独特なものは無教会グループである。無教

会グループは福音主義的であるか。ある人は、目に見える教会を否定するのであるから、無教会は福音主義的ではない、と即座に答えるであろう。だが、ほかの人は、内村鑑三の信仰は福音主義的であるから、無教会主義を福音主義的でないとして断定することはできない、というかもしれない。では、そのように彼が言うとき、何が内村鑑三の信仰を福音主義的であると判断させたのであろうか。もし教会観を尺度にするなら、無教会主義は福音主義的ではありえない。内村鑑三を福音主義的であるというとき、何を基準にしているのであらうか。それは聖書観であると思う。内村鑑三は、聖書はすべて誤りなき神のことばである、と信じて疑わなかった(『内村鑑三信仰著作全集』第一巻「聖書」参照)。この聖書信仰のゆえに、内村鑑三は福音主義者であった、ということができるのではあるまいか。

このことは、現在の私たちにとって、福音主義の内実を理解する一つの手がかりになると思う。それは福音主義の基準を聖書観におくことである。すなわち、「聖書はすべて誤りなき神のことばである」と信じる聖書観(聖書信仰)をもって、福音主義の基礎と考えるのである。そもそもプロテスタント教会は、聖書の權威の上に建てられている。とすれば、福音主義のキリスト教は、なおさらのこと聖書の真理の上に築かれなければならない。このことから、「聖書は誤りなき神のことばである」という聖書観に基づく立場こそ、真に福音主義的であるということができるのである。

今日、プロテスタント教会全般に、聖書観における大きな動揺が見られる。それは今に始まったことではないが、最近はその問題が特に表面化し、神学的・思想的潮流に大きな影響を及ぼしている。物質文明の異常な進歩にともなう急速な世俗化現象が、聖書およびキリスト教をも単なる歴史的・文化的遺産として見ようとする傾向に拍車をかけているのではなからうか。

今は、聖書を神の啓示とみなす伝統的な聖書観が大きく崩れようとしている危険な時代である。もし、この点で崩れ去るなら、キリスト論も教会論も根本的に破壊されてしまうことは火を見るよりも明らかである。

こうした現状を把握するとき、福音主義的キリスト教の基礎を、「聖書は十全靈感による神の啓示の書で、誤りなき神のことばである」と信じる聖書観(その意味での聖書信仰)におくことは、きわめて有意義なことであり、また必要不可欠な使命と課題をおびていることが、了解されるであらう。

では、現在の日本のキリスト教界において、福音主義的グループはどの程度の比率を占めているか。その正確な数字(比率)をつかむことはできないが、それが決して弱小なものではないことだけは確かである。困難な中にも地道に伝道を続け、その成果を上げているのは、まぎれもなく福音主義的グループの諸教会である。今後の日本のキリスト教の歴史において、福音主義的グループは必ずや大きな役割を演じるであらう。しかし、この期待が現実となるためには、なお福音主義的グループ

の側における多くの反省(自己批判)と新しい準備(体質改善)とが必要である。そのことは、次のように問うことによつて、いっそう明らかである。――なぜ、福音主義的グループは、現在のキリスト教界において主流的な位置を占め、指導的な役割を演じることができないでいるのか。

現在の福音主義的グループには、多くの欠けている点がある。そのことを率直に反省する必要がある。ここでは、二つの欠点だけ指摘しておく。

第一は、神学的反省の貧困である。福音主義的グループは、信仰においても伝道においても、きわめて熱心である。しかし、それを裏づける神学的反省を怠っていた。むしろ、神学的反省を軽んじる風潮さえ見られた。「理論(すなわち神学)よりは体験だ」という素朴な主張が、最近まで幅をきかせていた。しかし、そういう傾向に、ようやくブレーキがかかるようになってきた。神学的反省は、信仰体験と決して矛盾するものではない。このことが、次第に理解されるようになってきたのである。いかなる信仰体験も、それが言語で表現されなければ、ほかの人に伝達することができない。信仰体験を言語で表現することは、それ自体、すぐれた神学的な作業である。そのような神学的作業の不足が、福音主義的グループの協同的な働きを推進する上で、大きなマイナスになっていたことは、明らかな事実である。

第二は、福音主義的信仰を、この世の現実の諸問題とかかわ

らせて、現代における生きた関連性（レリヴァンス）のもとに把握する努力を怠ってきたことである。このことは、第一の神学的反省の貧困の中に含めて考えることもできる。しかし、それは聖書神学や教義学の課題ではなく、実践神学あるいは社会倫理の課題であるので、別に考えることにしたい。福音主義的グループでは、神学的反省の不足もあって、この点での無関心がさらに目立っている。それが福音主義的グループの体質的な弱さの原因となり、現実逃避的な姿勢をとらせる結果となっている。このままでは、福音主義的グループがキリスト教界において指導的な役割を演じ、社会的影響力を強めていくことは不可能である。したがって、福音的グループにおける神学的反省の気運の高まりが、さらに現実の諸問題と積極的に取り組む姿勢を生み出すようになることが、強く望まれている。

日本の福音主義的グループにおける、このような神学的反省と体質改善への要求と自覚の高まりを背景にして、まことに摂理のうちに、日本福音主義神学会の誕生を見るにいたったのである。以下に、その設立までの経過のあらましをお伝えし、ともどもに神の摂理を改めて確認し、心から御名をほめたたえさせていただきます。

設立までの経過

以上のような日本のキリスト教会における福音主義的グループ

の現状分析と問題意識の中から、この現状をなんとか打開し、日本の福音主義的諸教会の健全な成長と発達に奉仕するために、福音主義的グループを基盤にした神学会を設立すべきである、という熱意と気運が高まってきた。こうした客観情勢があったからこそ、予想外に順調に、日本福音主義神学会がうぶ声をあげることができたのであると思う。それゆえ、日本福音主義神学会の設立にいたる経過は、すべて神の明確な導きのもとにあった——これは一点の疑いをさしはさむ余地もないことである。

以下、日本福音主義神学会設立にいたるまでの経過を述べるにあたり、便宜上、次の三段階に分けることにした。①有志六人の会合から設立のための懇談会開催まで、②それ以後から設立発起人会開催まで、③それ以後から設立総会開催まで。

1 有志六人の会合から設立のための懇談会開催まで

神の摂理のうちに、一九六九年十月二十日（月）の午後、六人の者が、東京御茶の水の学生キリスト教会館の四階にあるJPC（日本プロテスタント聖書信仰同盟）事務所において会合し、「日本福音主義神学会」（この段階においては、もちろん仮称）設立のための構想について真剣に話し合った。その六人は、五十音順にすると、泉田昭（日本バプテスト教会連合実行委員長、練馬バプテスト教会牧師）、宇田進（日本基督神学校教授、日本基督長老我山教会牧師）、今野孝蔵（練馬神の

次のような案内書が、東京およびその周辺に在住の先生方に送られた。

「日本福音主義神学会」（仮称）

設立懇談会案内

主の御名をあげます。

これまで日本の福音主義的キリスト教会には、聖書の十全靈感を信じる「聖書信仰」の立場において、神学研究を共同で進める研鑽の場がありませんでした。

このたび、その必要を痛感する者たちが集まり、この目的実現のために、さらに広くこの趣旨と計画に賛同していただける諸先生方のお集まりをいただいて、左記のように、「日本福音主義神学会」設立のための懇談会を開催することにいたしました。どうか万障お繰り合わせの上、ご出席くださいますよう、ご案内申し上げます。

記

○日時 十一月二十一日（金）

午後四時～七時

○場所 練馬区桜台五ノ一八

教会牧師）、斎藤孝志（東京聖書学院教授、府中ホーリネス教会牧師）、榎原康夫（日本基督教改革派教会常任書記長、東京恩寵教会牧師）、村瀬俊夫（蓮沼キリスト教会牧師、聖契神学校講師）である。この顔ぶれからわかるように、六人はみな、牧師としての務めに召されながら、日本の福音主義的グループの神学的交流ならびに対話の促進に強い関心をいだいていた者たちである。そして、六人ともJPCの会員であり、そのうち三人はJPCで実行委員の責任を担っている者たちである。このことから明らかなように、その構想のうちにあった日本福音主義神学会の立場は、とうぜん聖書信仰にたく根ざすものであった。もう一つ六人の特色をあげるなら、彼らは大正後期の生まれのひとりを除けば、みんな昭和の初期の生まれである。すなわち、彼らはみな四十歳前後の働きざかりであり、ヴィジョン/Vision、ヴィタリティ/Vitalityをもってことにあたることができた。そこに念願のヴィジョンを実現するヴィクトリイ/Victoryが約束されていたと言えるであろう。ともかく、この六人の有志の会合で、日本福音主義神学会の設立をめざす構想について、完全な意見の一致を与えられたのみか、信仰の一致をも確認させられたことは、摂理のうちにあった神の導きというほかにない。

構想の第一歩は、日本福音主義神学会の設立を呼びかける懇談会を、さらに多くの同志たちを招いて開催することであった。このために、有志六人が世話役（呼びかけ人）となって、

○会費 三〇〇円(会費として)

○研究発表(約三十分)

東京聖書学院教授 小林和夫氏

一九六九年十一月三日

こうして一九六九年十一月二十一日(金)午後四時から、日本福音主義神学会設立のための懇談会が、練馬バプテスト教会において開催された。当日の出席者を教派別にあげると、次のとおりである。

矢内昭二、榊原康夫、泥谷逸郎(以上改革派)、小林和夫、斎藤孝志、松本祐三(以上ホーリネス)、泉田昭、坂本博、H・スコーグランド(以上バプテスト教会連合)、伊藤顕栄(アッセンブリー)、宇田進(基督長老)、後藤茂光(リーベンゼラ)、今野孝蔵(神の教会)、D・ホーク(TEAM)、有賀寿、尾山令仁、村瀬俊夫(以上単立)、以上十七名。ほかに委任欠席が、丹羽喬(同盟)、舟喜信(単立連盟)、松村悦夫(ホーリネス)、山口昇(単立)の四名。他にオブザーバーとして、スイスから来日中の国際福音主義学生連盟の神学担当主事H・ブラウンが出席。

懇談会は斎藤孝志の司会で進められる。まず宇田進があいさつに立ち、大要次のように語って、日本福音主義神学会の設立を要求する客観情勢を明らかにした。すなわち、「①現代の神

学思想的流れから見ると、ブルトマンの影響が圧倒的であった五〇年代が過ぎ、六〇年代はブルトマン後の時代にはいり、福音主義神学が強力に発言すべき好機を迎えている。②現代のキリスト教会における最大の課題は、積極的な宣教の神学を確立することであり、この点で福音主義の強力な発言が期待されている。このとき、教会と現代社会とのかわりを追究する社会倫理の分野を開拓する必要がある。③そのために、福音主義の神学者たちが共同で研究にたずさわるコミュニティ(共同体)の形成が不可欠である。」このあいさつは、出席者一同の大きな共感を呼んだ。こうして懇談会の最初から、日本において福音主義神学会を設立することの急務が出席者一同の心に深く刻印され、会は終始一貫、聖霊の賜う一致のうちに進行的た。

懇談にはいる前、東京聖書学院の小林和夫による研究発表に、しばし耳を傾けた。発表のテーマは「渡辺善太の聖書論に対するフツサールの影響」で、フツサールの現象学的方法が渡辺善太の聖書論に取り入れられている点を指摘した。興味ぶかい内容であった。そのあとで、村瀬俊夫が経過報告を述べ、懇談にはいった。

懇談を有効に進めるために、あらかじめ有志六人で作成した日本福音主義神学会の「規約案」が出席者全員に配られていた。それは全部で十条からなり(現在の規約と大綱においては変りない)、第三条に会の立場と目的が示されている(そ

2 懇談会以後、発起人会開催まで

の後の審議で立場と目的を分けて別々の条文にしたので、現在の規約は全部で十一か条からなっている。これによって、日本福音主義神学会の基本的性格を理解していただき、多くの積極的・建設的な意見の交換をすることができた。特に「本会は、聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場において、神学的研究を志す者相互の連絡を計るとともに、日本における福音主義神学の発達を期する」という立場と目的について話し合う中で、伝道の第一線にある牧師伝道者にプラスとなる会のあり方が強く求められ、教会に奉仕する姿勢をはっきり打ち出すべきであるとの意見が支配的であった。

こうして有意義な懇談の結果、日本福音主義神学会の設立に向かって、さらに具体的な計画を立てることになった。第一はさらに広く全国(沖縄も含めて)にいる同志に呼びかけて、設立発起人集会を開催すること。そして、懇談会に出席した全員が発起人になることを承諾した。第二は、その準備にあたる準備委員会を組織すること。そして、委員に懇談会世話役六人のほか、矢内昭二(日本基督教改革派教会大会議長、東京教会牧師)、H・スコーグランドの二人、計八人が選ばれた。

懇談のあと、別室で会食と交わりの時をもち、オブザーバーのH・ブラウン氏にスピーチをしていただく。その中で同氏は、「保守的な伝統を守りながら、現代の文化的、精神的状況をよく理解し、この世を変革する生きた神学の確立をめざすべきである」と、示唆に富む指示を与えてくださった。

発起人会の開催のために第二回の準備委員会が開かれたのは、十二月一日(月)午後、JPC事務所においてであった。このとき、懇談会の意見を参考にして「規約案」の作成を行なった。それから、発起人会の日時と場所を決定して、広く全国の同志に呼びかける案内文の内容について話し合った。その結果、十二月十日に、左のような案内を規約案とともに、全国の福音主義的神学校・聖書学校関係二十九通、個人あて七十五通発送した(これには発起人になることの諾否、ならびに発起人会出席の可否を問う返信用葉書が同封されていた)。

日本福音主義神学会(仮称)

設立発起人集会へのご案内

主の御降誕節を前にし、心から御名を
あがめます。

激動の六〇年代がやがて終わり、新たな
なる激動の七〇年代を迎えようとしてい
ます。ご承知のように、キリスト教会に

おいてもさまざまな激動の嵐が吹きまわつております。しかし私たちは、その根底に神学界の深い混迷があることを認めぬわけにはまいりません。聖書の十全靈感を信じる「聖書信仰」の立場において福音主義神学の交流と確立をはかることの急務が、今日ほど痛感される時はありません。現代の状況は、福音主義に対する大きな挑戦であるとともに、福音主義が強力に発言すべき絶好の機会であると信じます。私たちは、同じように感じてもらわれる福音主義陣営の諸先生方が多くおられることを知って、心から感謝しております。

すでに十一月三十日付の「クリスチャン新聞」に掲載されましたのでご承知のことと思いますが、私たちは、さる十一月二十一日（金）午後四時から、首都圏に在住の有志の先生方とともに練馬バプテスト教会に集まり、「日本福音主義神学会（仮称）設立懇談会」を開催し、日本における福音主義神学会設立のための準備的な相談をいたしました。そのとき

お集まりいただいた先生方は、（氏名略）十七名で、四名は都合で委任欠席されました。この懇談会で以上二十一名が、日本福音主義神学会設立の趣旨に賛同して、発起人となることを承諾しました。そしてさらに全国におられる諸先生方にも発起人となることをご承諾いただき、主の導きを得て、日本福音主義神学会発起人集会を開催いたしたく願っております。発起人集会は、左のように予定しております。

○時 一九七〇年一月二十六日（月）
午後一時半～五時

○所 東京練馬バプテスト教会

で参考までに発起人集会のとき審議する「日本福音主義神学会規約案」を同封いたしました。

この福音主義神学会をその目的にかんづて、有意義に発足させるために、ぜひ先生にも発起人としてご承諾をたまわりたく、主にあつてお願い申し上げます。またできましたら、発起人集会にご出席

下さいますれば幸いです。

一九六九年十二月十日

日本福音主義神学会設立準備委員

（氏名略）

準備委員たちは、発起人会の具体的計画を立てるため、十二月二十九日（月）午後四時から、第二回準備委員会を練馬バプテスト教会で開いた。こうして着々と準備が進み、やがて年が明けて、いよいよ一九七〇年一月二十六日（月）午後一時半から、新装なった練馬バプテスト教会二階集会室で、日本福音主義神学会設立発起人会が開催された。

会は第一部・礼拝、第二部・事務会に分かれ、第一部の礼拝が宇田進の司会で守られる。説教者は榊原康夫で、ルカによる福音書一章四五―五二節から「知識のかぎ」と題して語った。これは日本福音主義神学会の根本的なあり方を示唆する内容の豊かなメッセージで、出席者一同に深い共感と感銘を与えた（その内容は本誌に収録）。

礼拝のあと、斎藤孝志の司会で、事務会にはいる。まず出席者の自己紹介。当日までに発起人を受諾した六十六人のうち二十八人が出席した。その氏名は左のとおり（五十音順）。

泉田昭、伊藤顕栄（アッセンブリー篠原教会牧師）、稲尾三浩（入間ホーリネス教会牧師）、宇田進、小助川次雄（秋田・ルートル同胞聖書学院院長）、今野孝蔵、斎藤孝志、榊原康夫、

佐竹十喜雄（国分寺バプテスト教会牧師）、佐布正義（アッセンブリー池袋中央教会牧師）、坂本博（清瀬バプテスト教会牧師）、H・スコーグランド、A・P・ソルト（日本基督神学校教授）、高橋久之（蕨福音自由教会牧師）、中沢啓介（単立大野キリスト教会牧師）、丹羽喬（東京キリスト教短大助教授）、野口誠（茨城キリスト教大助手）、泥谷逸郎（改革派南浦和教会牧師）、藤井重顕（改革派横浜教会牧師）、藤田昌直（日基教団白山教会牧師）、松村悦夫（ホーリネス千葉栄光教会牧師）、宮村武夫（新約教団青梅教会牧師）、村瀬俊夫、矢内昭二、山口昇（共立女子聖書学院院長）、横山武（東京中央バプテスト教会牧師）、渡辺公平（東京キリスト教短大教授）、C・ワルバート（大阪聖書神学校教授）。

村瀬俊夫がこれまでの経過報告をしたあと、矢内昭二が議長になって、規約案の審議にはいる。次から次へと活発な意見や質問が出たが、どれも積極的建設的な内容のものばかりで、日本福音主義神学会に対する出席者一同の関心の深さに、準備委員たちがびっくりさせられたほどであった。すべてが神の摂理のうちに導かれていることが、ひしひしと感じられた。審議の結果、第一条の名称は異議なく認められ、「日本福音主義神学会」が正式の名称となる。第二条の事務所の場所は、原案どおり「東京都東村山市廻田町一ノ一四七七 東京聖書学院内」とすることが認められた。第三条の立場と目的は分けて、第三条に立場、第四条に目的をしるべきだという意見が多数を占め

た。また目的の最後の「教会の健全な成長と発達を期する」は、この神学会が教会に仕えるものであることを明確にするため、「教会の健全な成長と発達に奉仕する」と改めるように、大方の意見の一致を見た。これによって、この神学会は一部の神学好きのサークルではなく、伝道の第一線にある牧師や伝道者を励まし、地道な教会形成に奉仕するものであることが確認された。これは大いに特筆されるべき点である。この点を裏づけるように、第五条の会員には、三種の会員が設けられ、正会員には専門の神学者・研究者のほか、牧師・宣教師もなることができ、神学生や信徒も準会員になれるように配慮されている。もう一つの賛助会員は、神学校や聖書学校などの団体である。そして、会費は年額、正会員が千円、準会員が五百円、賛助会員が一口五千円ということも認められた。それから、研究会・講演会の開催、年一回以上の会誌の発行などの活動方針も了承された。その他、いろいろ有益な意見が出されたが、それに基づいて「規約案」を書き改める仕事は準備委員会に一任された。

このように出席者一同の熱心な賛同を得て、設立総会に臨む段取りについて話し合が進む。その結果、設立総会を四月二十七日(月)午後一時半から、記念講演会を午後六時半から東京で行なうことが決まり、会場とプログラムは準備委員会に一任された。こうして午後五時半、感謝のうちに発起人会を閉じた。

3 発起人会以後、設立総会開催まで

発起人会のときの意見を参考にして、規約案を練り直し、さらに設立総会への段取りをつけるための第三回準備委員会が、二月二日(月)午前十一時から、日本基督神学校で開かれる。規約案は全部で十一條からなり、それに必要と思われる細則を五条加えた。細則の中に盛り込まれた条項は、名誉会員、常任理事会をおくこと、五つの部門(聖書学、組織神学、歴史神学、実践神学、宗教学及び宗教哲学)を設けることなどである。それから設立総会の会場と講師を決定し、全国の発起人に通知するため、「発起人会を終えて」と題する文書を準備委員の名で作成することになった。それは規約案と次に述べる「入会のすすめ」とともに、二月十日に発送された。その内容は左のとおりである。

発起人会を終えて

主の聖名をさんびいたします。

皆さまのお祈りに覚えていただきました日本福音主義神学会設立発起人会は、予定のとおり一月二十六日(月)午後一時半より練馬バプテスト教会において、私たちの思いをはるかに越えた充実した集会として祝福のうちに終えることがで

設立総会礼拝説教者

吉岡繁(神戸改革派神学校校長)

記念講演会講師

宇田進(日本基督神学校教授)

服部嘉明

(大阪キリスト教神学院講師)

なお、設立総会に備えての「入会のすすめ」を十部あて同封いたしました。そのために最善のご協力をお願いいたします。

二月十日

きました。これまで発起人を承諾された方々は計六十六名で、そのうち左の二十八名が発起人会に出席されました。(氏名略)

ご出席の発起人から、この会に対する率直な希望や意見をうかがう中で、規約案の審議にはいり、その時の有益なご意見を取り入れ、二月二日(月)に開かれた準備委員会で最終的な草案を作成いたしました。ご出席の発起人の方々から熱心なご意見や励ましをいただき、本会の設立が全く神のみ旨にかなったものであることを、いっそう強く確信させられ、心から感謝しております。

発起人会において、日本福音主義神学会の設立総会、並びに記念講演会を左の要領で開くことが承認されました。

日時 四月二十七日(月)

午後一時半—五時 設立総会

午後六時半—九時 記念講演会

場所 東京都千代田区神田駿河台

二ノ一

学生キリスト教会館

これに添えて同封された「入会のすすめ」は、設立総会まで、さらに多くの賛同者を得たいとの願いから、発起人六十六名の連名で用意された。その文面は左のとおりで、末尾に「入会申込書」の欄を付してある。

入会のすすめ

このたび日本における聖書信仰に立つ福音主義諸教会の健全な成長と発達を願ひ、その神学的研究を助け、相互の交わりをはかる目的で、私たちは時にかなっ

た主の導きを深く確信し、「日本福音主義神学会」を設立することを決意いたしました。そのための設立総会がきたる四月二十七日(月)午後一時半から、御茶の水学生キリスト教会館において行なわれます。どうか、この会の立場と目的にご賛同の上、進んでご入会くださるよう主にあつてお願いいたします。

一九七〇年二月十日
日本福音主義神学会設立発起人
(六十六名の氏名略)

四月二日(木)午後一時半から、練馬バプテスト教会で第四回準備委員会を開き、設立総会に臨む最終的な準備をととのえる。このときから、今までの八人のほか、伊藤顕栄、丹羽喬、舟喜信(聖書神学舎教師、浜田山教会牧師)、山口昇の四人が設立準備委員に加わる。設立総会と記念講演会のプログラム、その他の必要な資料を、当日までに村瀬俊夫と斎藤孝志が用意することになった。設立総会の委員は、これまで発起人を承諾した七十二人(二月十日以降六人増加)のほか、四月十日までに入会の意志を表明し、会費を前納した者を加えることにした。なお準備委員会は、設立総会が開かれる当日、四月二十七日(月)午前十一時からJPC事務所、最後の会合を持つ。

た。
こうして、いよいよ歴史的な設立総会を迎える。時に一九七〇年四月二十七日午後一時半。会は、左のプログラムのとおり進行した。

日本福音主義神学会
設立総会プログラム

第一部 開会礼拝 (午後一時半—二時半)	
一、讃美歌 一九四	△司会▽山口 昇
一、聖書 ローマ一・一一—一七	
一、祈り	伊藤顕栄 小林和夫
一、説教「神の福音」	吉岡 繁
一、讃美歌 二六七	
一、献金	丹羽 喬
一、頌栄 五四一	常葉隆興
一、祝禱	
第二部 総会議事 (午後二時四十五分—五時)	
△議長▽矢内昭二	

一、議長あいさつ	
一、経過報告、会員紹介	村瀬俊夫
一、規約審議	△説明者▽今野孝蔵
一、事業計画	△〃▽榊原康夫
一、予算審議	△〃▽今野孝蔵
一、役員選出	

開会礼拝の説教の中で、吉岡繁は、「神学は、神について私たちがどれほど知ったかより、罪人である私たちを神がどれほど愛し、知りつくしておられるかを知ることから始まらねばならぬ」と、聖書に啓示された「神の福音」——旧約聖書において約束され、イエス・キリストの十字架の死と復活によって成就された福音——を宣明していくことが、日本福音主義神学会の使命であることを力説し、適切な指針を与えてくださった。

総会議事にはいり、用意された資料に基づいて経過報告と会員の紹介(点呼をかねる)が行なわれる。会員名簿に掲載された総会会員は、正会員八十六人、準会員三人、名誉会員十一人、計百人で、そのうち点呼のときの出席者は正会員三十九人、名誉会員二人、計四十一人であった(会員は沖繩を含む日本全国にわたり、当日も東北および関西から多くの会員が出席していた)。他に遅れて出席した会員とかなりの傍聴者があり、総会の出席者総数は約七十人に達し、予想以上の盛会にびっくりさせられた。

規約案の審議は、慎重に、かなりの時間をかけて行なわれた。第三条の立場の条文の一部をめぐって修正案が出されたが、これは否決された。細則の中に、会員の資格審査の項を入れる修正案は賛成多数で可決され、細則第二条に入れることになった。したがって、細則は原案の五条から六条になる。こうして承認された「日本福音主義神学会規約」は、本誌の二二六、二二七頁に掲載されているとおりである。

事業計画では、年一回の会誌の発行のほか、十一月二十三日(月・勤労感謝の日)に研究発表会ならびに公開講演会を開催することが承認される。会誌はA5判一〇〇ページぐらいのもので、十月下旬に発行する予定。

予算審議では、必要経費五十万円(会誌発行費二十五万円、行事費十五万円、事務費その他十万円)を、会費収入三十万円、献金その他の収入二十万円で充当する案を承認した。いよいよ最後に、役員(理事)の選出を行なう。準備委員会の案が承認され、全会一致で左のように決まる。

△理事長▽矢内昭二
△事務担当理事▽
編集 宇田 進、榊原康夫
書記 村瀬俊夫、斎藤孝志
会計 今野孝蔵、泉田 昭
△部門担当理事▽
聖書学 山口 昇、伊藤顕栄、丹羽 喬、服部嘉明、

鍋谷堯爾、柳原康夫
組織神学 小林和夫、宇田 進
歴史神学 泥谷逸郎、舟喜 信
実践神学 吉岡 繁、尾山令仁
宗教学・宗教哲学 矢内昭二、H・ズコーランド、H・
A・スミット

右の十九人の理事のうち、理事長と事務担当理事全員、部門担当理事の中から山口昇、伊藤顕栄、丹羽喬、舟喜信、H・ズコーランドの計十二人が常任理事に選ばれる（あとから尾山令仁が加わり、現在の常任理事は全部で十三人である。なお参考までに、常任理事の平均年齢は四十歳である）。
こうして、すばらしい摂理のうちに日本福音主義神学会は誕生し、午後五時十分、言い尽くせない感謝と感動のうちに設立総会の幕を閉じた。

このあと午後六時半から記念講演会が持たれたが、そのプログラムを左に掲げる。

日本福音主義神学会

設立記念講演会プログラム

（午後六時半—九時）

△司会▽村瀬俊夫

- 一、讚美歌 五〇一
- 一、理事長あいさつ

矢内昭二

- 一、聖書 ネヘミヤ記八・一一八 舟喜 信
- 一、祈り 尾山令仁
- 一、第一講演「現代の神学的状況における聖書の神学の課題」 宇田 進
- 一、讚美歌 三七九 今野孝蔵
- 一、献金
- 一、第二講演「御言葉の権威と学究」 服部嘉明
- 一、報告 泉田 昭
- 一、頌栄 五三九 堀川 勇
- 一、祝 禱

夜の記念講演会は、定員百五十人のホールに続々と聴衆が詰めかけ、開会時にはほぼ満席となり、補助椅子を用意しなければならぬ盛況ぶり、日本福音主義神学会への期待の大きさをかせてくれた。最初の宇田進の講演は、現代の神学的状況において日本福音主義神学会を位置づけ、これに今後の展望を与えるもので、設立記念講演にふさわしい充実した内容であった（その全文が本誌に収録されている）。

第二の服部嘉明の講演は、学究的関心の乏しかった教会的背景の中で苦しんだ経験から語り、現代のカトリック教会およびユダヤ教における聖書研究の熱心にふれながら、御言葉の権威

を信じる福音主義的立場において、学究への関心が必要であることを力強く訴えた。それは、①誤った聖書主義に陥らないために、②最近の聖書研究の成果を参考に、注意ぶかく聖書の本文を見るために、③他の立場への理解と評価をもち、福音主義における交わりと一致を進めるために必要である。

こうして二つの講演とも、満堂の聴衆（約百八十名）に深い感銘を与え、記念講演会は午後九時二十分に閉会した。

○
もう予定の紙数を超過してしまったが、その後の経過で必要と思われることを報告しておきたい。第一は、会誌の名称が「福音主義神学」と決まったこと。第二は、十一月二十三日（月・勤労感謝の日）の研究発表会と公開講演会の会場が日本基督教団富士見町教会に決まり、公開講演会の講師に、オーストラリアのジェーロング市にある改革派神学校教授で、現代の福音主義的グループにおける代表的神学者であるクラス・ルニア博士が決まったこと。第三は、各部門の活動の推進がなされつつあることである。

○
おわりに、日本福音主義神学会設立のために、「クリスチャン新聞」がその紙面の報道をもって協力してくれたことを感謝しなければならない。設立のための懇談会、発起人会、そして設立総会のこと、毎回ニュースに取り上げられたほか、設立総会を前にして、四月五日号と十二日号に、それぞれ村瀬俊夫

「日本福音主義神学会——歴史的発足を前に」、宇田進「日本福音主義神学会が目指すもの——共同のバイブル・シンクを」の記事が掲載され、大いにPRの役を果たしてくれた。

（連沼キリスト教会牧師、聖契神学校講師）

日本福音主義神学会規約

一二六

第一条（名称） 本会は日本福音主義神学会と称する。
第二条（事務所） 本会は事務所を左記におく。
東京都東村山市廻田町一の一四七七

東京聖書学院内

第三条（立場） 本会は聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場にたつ。

第四条（目的） 本会は前条の立場にたつて、神学的研究を行ない、相互の交流をはかり、教会の健全な成長と発達に奉仕することを目的とする。

第五条（事業） 本会は前条の目的を達成するために左の事業を行なう。

- 一、研究会の開催
- 一、講演会の開催
- 一、会誌の発行
- 一、その他本会の目的に必要な諸活動

第六条（会員） 本会の会員は左の三種とする。

- 一、正会員 本会の目的に賛同する神学教師、牧会伝道に

第七条（理事会）

本会の運営は理事会がこれにあたる。理事会は総会において正会員の中から選出された十名以上の理事をもって構成する。理事会は理事長、及びその他の必要な役員を互選する。理事の任期は二年とする。

第八条（総会）

本会は年一回総会を開き、事業報告、会計報告、予算審議、理事の改選、その他本会の目的の達成に必要な事項の協議を行なう。

第九条（会員の特権）

- 一、会誌の配布を受け、研究会に出席することができる。
- 一、正会員は会誌ならびに研究会で研究発表をすることができる。

第十条（経費）

本会の経費は会費、及び献金による。
一、正会員の会費は年額千円、準会員の会費は年額五百円、賛助会員の会費は年額一口五千元とする。

第五条（常任理事会）
第六条（部門）

計とする。
本会は常任理事会をおく。
本会は左の五つの部門をおく。

- 一、聖書学
- 一、組織神学
- 一、歴史神学
- 一、実践神学
- 一、宗教学及び宗教哲学

第十一条（規約の改正）

本会の規約の改正は理事会の議を経て総会の決議による。

（附則）

本会は必要に応じて細則を設けることができる。

（細則）

第一条（入会）

本会に入会を希望する者は、正会員一名の推薦により常任理事会の議を経なければならぬ。

第二条（会員資格審査）

本会には必要に応じ常任理事会において会員の資格審査を行なうことができる。

第三条（名誉会員）

本会には常任理事会の議を経て名誉会員をおくことができる。

第四条（理事会の構成）

本会理事は理事長一名、部門担当理事、及び事務担当理事によって構成される。事務担当理事は、編集、書記、会

一二七

編集後記

「完全原稿で集めればよい」、「いざとなれば、神学生や教会員にも手伝ってもらいましょう。私たちも協力しますよ」、という大変結構なお話で、編集担当の任を仰せつかりました。記念すべき創刊号なので、経過を報告しておきたいと思ひます。学会創立直後、福音系でいくらか取り扱われる「聖書論」は避けて、「神論」を主題にすることし、論文・書評・学界ニュースなどの紙数と担当者を決めて依頼しました（五月）。礼拝説教と公開講演は、理事会決議によって収録したのですが、いずれも、なまの原稿がなく、少々変更されたかもしれせん。七月末に原稿完成の催促をし、八月末で完全原稿回収、と予定していましたが、夏は編集者多忙のため、まず、催促の予定がくずれました。執筆者も、創刊号なのでほとんど理事ばかりだったのですが、それでも辞退者が出て、穴があくことになりました。結局、十月になって原稿を編む作業は、学会員でなく、いのちのことは社出版部員のかたがたの御芳に負うことになってしまいました。しるして感謝します。

主論文の一つに、小林和夫氏のを頂きましたが、主題からそれると、全体の紙数が予定を大幅に上回るため、ふさわしい主題の時まで出版を延期させていただきます。服部嘉明氏の論文は全引用文がヘブル語・外国語のままでしたが、読者のため

と印刷の都合から、榊原が本文中の引用外国語文を和訳し、ヘブル語の一部は抹消し他は仮名書きに改めました。スミット氏の評論は、御本人がローマ字で日本語に書かれたものを、榊原が日本語に変え、文を整頓しました。文字使いは統一せず、各人の個性を留めてあります。裏表紙の英文は、フォックススウェル氏と宇田の訳です。執筆者と読者の御了解を得られれば幸いです。

（榊原）

昭和四十五年十一月二十日発行 頒価四〇〇円

編集者	宇田進
榊原康夫	
発行者	日本福音主義神学会
印刷	いのちのことは社印刷部
発売	いのちのことは社